

幕府イギリス留学生(上)

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

36

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

193

(発行年 / Year)

1989-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003204>

幕府イギリス留学生〔上〕

宮 永 孝

目次

- 一 はしがき
- 二 イギリス留学生派遣の事情
- 三 イギリスへの航海
- 四 英都ロンドンにおける留学生
- 五 徳川昭武のイギリス訪問
- 六 幕府倒壊後の祖国へ
- 七 あとがき

一 はしがき

幕末になると、徳川幕府は諸學術を学ばせるために伝習生（留学生）を次々とヨーロッパに送り出した。その嚆矢



イギリス留学生在上海で撮った写真

岩佐	安井	億川	杉	福沢	林	外山
伊東	川路	ロイドと箕作大六	中村	成瀬	箕作	市川

となったものは、文久二年（一八六二）のオランダ留学生（内田恒次郎以下十四名）である。次いで慶応元年（一八六五）には、ロシア留学生（山内作左衛門以下六名）がペテルスブルクへ、翌慶応二年（一八六六）には、——本稿のテーマ——イギリス留学生（川路太郎以下十三名）がロンドンへ、また同三年にはパリへフランス留学生（栗本貞次郎以下九名、のち計十九名ほどになる）が派遣された。

これらの留学生たちは、オランダ留学生を除くと、渡航解禁後に初めて海外に派遣された一団であり、いずれも強い国家意識・国家的使命感にあふれ海のかなたの国々に向かった人々である。が、渡航後、留学生生活が緒について間もなく、幕府が中途で故国へ引き上げざるを得なくなった。

倒壊したといった悲報に接し、留学の実を十分にあげることなく、従って高度の語学を習得し、それを駆使して西欧の社会・文化等を知悉するまでに至らず、その理解も皮相的なものであり、うわすべりの知識を得たにすぎなかった。帰国後、西洋の知識・技術の移入者として顕著な功績を立てた

ものは一部の者にとどまり、多くは単に西欧世界の実見者に終った。

幕府派遣の留学生たち、ことに英・仏・露に赴いた者は、滞在期間も短いこともあって、留学の直接的成果をあげ得なかったが、異文化の中での実生活を通して、西欧社会そのものを我が眼で見、肌で感じ、そのよしあしを考えさせられただけでも、かれらにとって大きな意義があつたことと思われる。

幕末期の幕府および諸藩の海外留学は、やがて明治の新生日本が、西欧化を志向する際の指針ともなり、またその留学政策は明治新政府へと継承されてゆく。

本稿は、幕府が末期的症状を呈し、やがて訪れる倒壊を目前にしながら、乏しい財力の中から、十四名の若いサムライをイギリスに送った壮挙と挫折について論じたものである。

川路太郎の「英航日録」と箕作大六の「英行日記」(横浜出帆よりカイロ到着までの部分しかない)を中心に据え、適宜にイギリス外務省所蔵の外交文書(マイクロフィルム)、当時の英字新聞(マイクロフィルム)の記事などを利用し、地図・写真等もなるべく当時のものを用いた。遺憾な点は、資料不足により、ロンドンにおける留学生生活の事情・生活地等について十分に把握できなかったことで、将来機会があれば実地踏査を行ないたいと思つている。本稿をそれまでの中間報告としておく。

二 イギリス留学生派遣の事情

文久・元治・慶応と時勢が刻々と変化してゆく中で、徳川幕府は軍制を改め、三兵を改良せんものと計った。慶応

元年十一月十九日、老中水野和泉守（忠精）は駐日イギリス公使兼総領事ハリー・パークス（一八二八〜八五、一八六五〜八三まで在任）に「繰軍規範」（兵術）伝習のため、留学生を二十名ほど派遣したいので周旋をお願いしたい、と書簡をもって申し入れた。

次いで同年十二月二十一日に至り、老中松平周防守との連署で再び伝習生派遣の依頼状を送った。その内容の骨子は次のようなものである。——このたび留学生を三、四十名ほど選抜し、取締の士官とともに貴国へ遣わせたい。留学生にはイギリスの政事・兵制・士官が心得べき学科などを教育して欲しく、他に貴国隆盛の制度なども学ばせて欲しい。もしイギリス政府がこの頼みを聞き入れて下さるようであれば、直ちに留学生を出帆させたい。費用は、日本政府（幕府）のほうでもつつもりである。委細を閣下から本国政府へお伝え下さい。

イギリス側はいちに三、四十名の留学生を引き受けることに大きな困難を覚えたので、この数はその後十名に減じられた。翌慶応二年二月十日、幕府は諸学術伝習生十名の派遣を正式にパークスに依頼し、ついにイギリス政府の承諾を得るに至った。

同年四月、幕府は幕臣の子弟より留学生を募った結果、約八十名ほどの志願者が集ったので、一橋門外蕃書調所（のちの開成所）で選抜試験を行なった。試験問題は、和文の対策文（ふつうの作文か）・英文和訳・和文英訳であり、どれもやさしい短文であったという。⁽¹⁾ 合格者は、開成所に関係する者の子弟がいちばん多く、次いで洋学者や医師の子がそれにつづいた。

同年八月八日、合格者十二名にイギリス留学の辞令が下り、翌九月初旬には留学生取締二名の発令があった。かくしてここにイギリス留学生十四名（取締二名・留学生十二名）が正式に決定をみたのである。その身分・氏名・年

齡・出自等は、次のようなものである。⁽²⁾

取締 歩兵頭並

川路太郎 (二十三歳)

*元外国奉行川路聖謨嫡男

同 儒者

中村敬輔^{けいすけ} (三十五歳)

*幕臣中村武兵衛の子

外国奉行支配調役次席

箕作大六^{みつくり} (十二歳)

*翻訳御用秋坪次男

開成所句読教授出役

箕作奎吾^{けいご} (十五歳)

*翻訳御用秋坪総領

開成所英学世話心得

市川森三郎 (十五歳)

*開成所教授職斎宮次男

林董三郎^{とうざぶろう} (十七歳)

幕府イギリス留学生

(上)

幕府イギリス留学生〔上〕

* 奥医師洞海三男

開成所英学世話心得

杉 徳次郎（十七歳）

* 開成所教授職並享二厄介甥

成瀬錠五郎（十八歳）

* 歩兵頭席大砲組之頭対馬守総領

開成所英学教授手伝出役

外山捨八（十九歳）

御番医師並医学所教授職

億川一郎（十九歳）

* 緒方洪哉厄介従弟

外国奉行支配調役

福沢英之助（二十歳）

* 翻訳御用諭吉弟（じっさいは別人）

寄合医師医学所取締

伊東昌之助（二十歳）

* 長春院四男

安井真八郎（二十歳）

*小十人格御軍艦頭取完治厄介弟

岩佐源二（二十二歳）

*小石川御薬園奉行

岡田利左衛門支配 同心三之助伴

留学期間はパークスの意見により、とりあえず五カ年と定められたが、各留學生の學術修業の進捗により、延長してもよいということに定められた。³⁾

留学中の生活費および手当であるが、各留學生は一カ年の衣食住費二百五十ポンドの外に、諸雜費（特別手当分）として一カ年二百ドル給され、また手当として一カ月三十兩支給されることに決った。従つて留學生一カ年分の衣食住費（各個人に交付される分）は、一万四千ドル（メキシコドル）。諸雜費（特別手当分）は一カ年二千八百ドル。手当一カ年分として五千四十兩となる。

その他、取締に交付される特別手当分（諸器械書籍買上および非常用意金）三千ドルが渡されることになった。慶応二年十月十八日、各留學生は常磐橋の陸軍所⁴⁾において、御手当金七ヵ月分二百十兩を下付された。

また川路・中村の名で横浜のオリエンタル銀行支店に、一行の船賃その他の経費として三万七千六百五十ドル（メキシコドル）預けられた。この金額は、次のように使われた。

英国サザンプトン港までの船賃……………一〇、四四四ドル（一人七四六ドル）

幕府イギリス留學生（上）

引率者兼世話人ロイドの船賃および謝礼……………一八〇〇ドル

留学生が香港まで現金で持参した分……………五〇〇ドル

留学中の費用……………二四、九〇六ドル

当時、三万七千六百五十ドルは英貨五千四百二十二ポンド四シリング十ペンスに相当した。

幕府は、かねてより長途の船旅の経験のない若い留学生をイギリスに送るに際して、目的地サザンプトンまで同行してくれるイギリス士官の雇い入れをパークスに依頼していた。が、パークスは慶応二年十月二十四日、イギリス海軍付の牧師兼海軍教師W・V・ロイドというものを推薦して来た。⁽⁵⁾ロイドは三年にも及ぶ支那・日本の勤務をおえて故国に帰るところであった。

パークスより日本人留学生の引率とイギリス到着後の世話を打診されたロイドは、条件付で引き受けることを承諾し、幕府より千二百ドルの謝礼金を受け取った。またパークスも留学生の世話をゆだねるに際して、いろいろロイドに要請した。——船が寄港したら、そこにある英政府の出先機関（総領事館）に到着したことを報告して欲しい。事情が許せばアレクサンドリアの英領事館にも連絡して欲しい。サザンプトンに着いたら、外務省からの指示が届いているかも知れないが、もしなければ留学生と直ちにロンドンに赴き、外務次官に到着を報告し、指示を仰いで欲しい。できるだけひんばんに旅の進み具合、留学生の状態と行動等も知らせて欲しい。

イギリスに着いたら、航海中の出費についての明細書を送って欲しい。またその写しを外務次官まで送付して欲しい等々。⁽⁶⁾

慶応二年四月九日、幕府は「海外渡航差許布告」を公布した。士農工商身分を問わず、だれでもその筋に届け出、免許・印章が得られれば、自由に条約締盟国（八カ国）へ出かけることができるようになった。幕府は同年四月十三日、各国代表団にもこの布令を伝えたが、イギリス公使館には他の国に先んじて渡航免許状と印章（『日本政府許航
佗邦記』とあるもの）の見本を送っている。⁽⁷⁾

幕府のイギリス留学生十四名こそ、実質的に旅券パスポートを与えられた第一号とも考えられる。が、かれらが持参したものは、一般の免許状とは異なり、免許状番号・本人の特徴（年齢・背丈・風ぼう）・保護要請文等を示すものは一切ない、単に政府の印章を押した略式のものであったと考えられる。

『続通信全覧』（仏国留学一件 一）には、フランス留学生（慶応三年に派遣）に持たせた免許状の見本が見られる。

歩兵頭並

川路 太郎

右之者英吉利国江為留学御差遣もの也

慶応二年丙寅八月八日

日本政
府許航
佗邦記

肩書

何之誰

右之者英吉利国江為留学御差遣もの也

年号干支月日

御印

これから考えて、イギリス留学生たちは、上に掲げたような免許状（旅券）を持参したものであろう。一行は、こ

の免許状を横浜出帆の前日（慶応二年十月二十四日）に、語学所において川路より渡された。

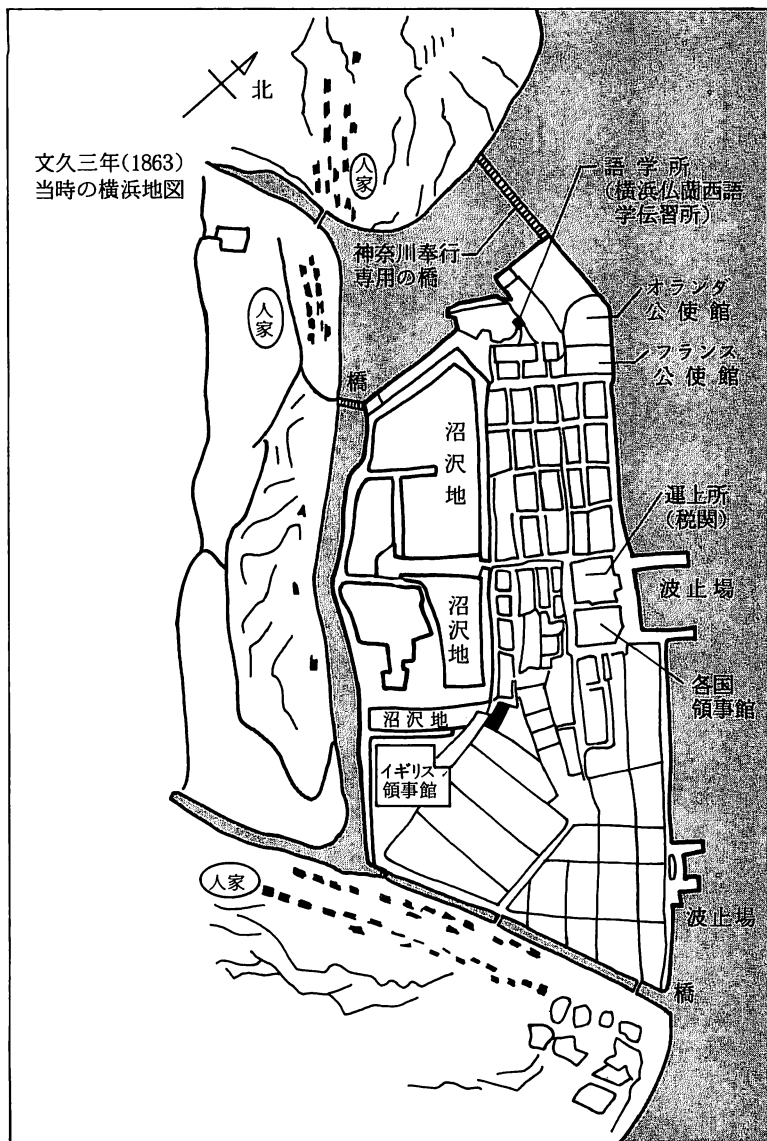
慶応二年九月十六日、この日留学生一同は、パークスの面会要請に応じて高輪泉岳寺前のイギリス公使館（黒板塀でかこまれた新築の平屋二棟）に赴き、公使に面会した。⁽⁸⁾

三 イギリスへの航海

慶応二年十月二十日（一八六六・一一・二六）、取締の川路太郎・中村敬輔を除く、留学生十二名は個々に江戸を立ち横浜に向った。各留学生は、それぞれ親族知人らに見送られながら江戸をあとにするのだが、留学生の中で最少の箕作大六（十二歳）には、新橋あたりまで送り来るものがあつた。大六は同日の午後一時ごろ大森に着き、午後四時神奈川の宿に到着、直ちに明沢屋に旅装を解いた。⁽⁹⁾

翌二十一日の午後一時ごろ、川路・中村両取締が神奈川に到着、直ちに横浜に赴いた。伊東は、同日の午後四時ごろ神奈川に着き、ほどなく横浜に向った。夜十時ごろ、一足先に横浜に赴いた川路・中村より大六のもとに回状が来、それには明日、羽沢屋まで来るようにとあつた。大六は、二十二日の朝、船にて横浜に赴き、オランダ領事館の裏手——弁天社の北隣の地にある「語学所」（横浜仏蘭西語学伝習所とも横浜表語学所 College Japonais-Françaisとも称した）を訪れた。同夜、羽沢屋で一泊。おそらく、この夜十四名の顔ぶれがそろつたものと思われる。

翌二十三日、一同語学所に行き、二十五日の午前中まで同所でやっかいになり、その間に渡航に必要なしたくを整え、また為替の件などを処置した。



十月二十五日(一二・一)、一行十四名は語学所を出、午後三時ごろイギリス領事館(百五十五番地)に挨拶に赴き、パークスと会った。パークス夫妻は一同を大いに歓待し、洋酒などをふるまってくれた。パークスは別れに臨んで、日本人留学生に一言餞別のことを贈った。

「此度は万里外誠に御苦労千万、折角(つとめて)自愛勉学成業あるへし。乍併多年英国在留して洋風に伝染し、遂に父母の国の尊きを忘候儀有之間敷とつらく考ふ」(「英航日録」)。

パークスが云いたかったのは——異国に勉学に赴かんとする諸君らは健康に注意し、学業をなしとげて欲しい。しかし、イギリス滞在中は、いたずらに欧風に染まることなく、洪恩ある祖国日本のことを忘れず、日本精神を発揚して勉学に精を出して欲しい、——といったものであったのであろう。

川路はこの言葉にひじょうに感激し、「此語欧呂巴人(ヨーロッパ人)の真面目にして以て洋儼家(西洋かぶれ)の藥石(薬石)となることば」となすへし」と日記に記している。

同日の午後四時ごろ、一同はロイドに引き合わせられたのち、港に停泊中の英艦ニポール号(Nepaul——のちの大阪丸)に塔乗した。同艦はイギリスの郵便船である。その大きさは、長さ三十五間、幅六間ほど。二本マストのスクリュー船であった。客室は約二十。日本人留学生らは、一部屋に二、三名ずつ入れられた。イギリス留学生たちは、外国奉行川勝近江守(広道)、騎兵頭並成島柳北(惟弘)、岡田九一郎その他の見送りを受けながら、日が西に傾くころ横浜を出帆した。

一同は冷え冷えとする風に吹かれながら、甲板の上に佇んで横浜の町並みとあたりの風景にじっと瞳をこらし、故国に最後の別れを告げたことであろうが、出国の際の心情を伝える記録は何も残されていない。同夜、一同は船内の

食堂で初めて洋食を口にしたが、川路の「英航日録」によると、夜七時に晩飯が出た⁽¹⁰⁾、という。食物は肉類（牛・羊・鶏）が中心であり、航海中、時々、日本人のために特別に白米（支那米）を出してくれたという。ニポール号のイギリス士官たちは皆、とても親切にしてくれた、ということ、フオーク・ナイフ・スプーンの持ち方やその使い方まで懇切に教えてくれたばかりか、食事中、出された料理の英名をも教示してくれた。消灯は夜十時で、灯火を消したのち就寝した。

この日、『ザ・ジャパン・タイムズ・オーバークランド・メール』紙（*The Japan Times Overland Mail*, vol. II, No. 29, 一八六六・一二・一付）は、明朝ニポール号は上海に向う、といった小記事を書いた。乗客は、ロイド師、H・ハーマン、J・カニンガム両氏および召使、十四名の日本人らである、と伝えている。十四名の日本人とは、いうまでもなくイギリス留学生たちのことであるが、かれらは「甲板乗客」（*deck passengers*）とある。これは「居室のない乗客」の意である。

十月二十六日（一二・二）、仏暁、川路は起きると、甲板の上を遊歩した。お昼ごろ、船は伊豆の石廊崎（伊豆半島最南端の岬）を通過し、遙かに大島を望見し、やがて遠州灘（帆船時代の難所）の沖を過ぎた。すでに一点の山も見えず、ニポール号は蕩々たる大海原を西北を指して気走している。船はそのうちに動揺するようになり、四、五名のものが船酔いに苦しんだ。午後三時ごろ、尾張国を遙かに見たが、船の動揺はますますひどくなる一方で、中村敬輔を始めとし、残りの者は皆、寝だなに臥せてしまった。川路は船に強いたちのようで、仲間が船酔いのために寝だまで呻吟しているのに、「我は少しも不酔平常の如し」（「英航日録」）とうそぶいている。

この日、川路らイギリス行の者たちは、自分たち以外に日本人が乗船していることを知って大いに驚いた。それは



駐日イギリス公使時代のパークス
(『ハリー・パーク卿伝』1894年刊より)



幕末の神奈川の宿
(H. A. ティリ『日本・アムール河・太平洋』1861年刊より)

奇しくもヨーロッパに向うとする異国遍路の旅芸人たちの一行十五、六名(三等船客)であった。幕府はこの年の四月、留学・商用户の海外渡航を公認したから、この一座はお上にはばかることなく、免許を得て公然と旅をつづけていた。川路は町人風の男数名に近づき、いろいろ尋ねてみたところ、

「私たちの商売は諸国を巡歴し、御慰みのためなる者ゆえ、このたびお上にお問い合わせし、ロンドンまで罷越するところです」(『英航日録』)。

との返事を得た。

西回りでヨーロッパに向うとするこの旅芸人の一行は、浅草田原町松井源水の巡業団であつた。一行の構成は、

「独楽廻し」……………十三代松井源水

女房と娘

「自動人形」……………隅田川浪五郎

女房(小まん)と娘

同 右……………浪七

「浮かれ蝶」……………柳川蝶十郎(本名は青木治三郎、紙の蝶を使う初代一蝶斎の弟で二十歳)

同 右……………朝吉

山本亀吉

小滝

太郎吉

矢奈川嘉七

その他、七歳と八歳の少年二名から成つていた。⁽¹⁾

幕府イギリス留学生(上)

その夜、日本人留學生たちは夕飯のあと、日本の柿・梨・栗などの皮をむいて食べたが、それを食して故国を想わざる者はいなかった。

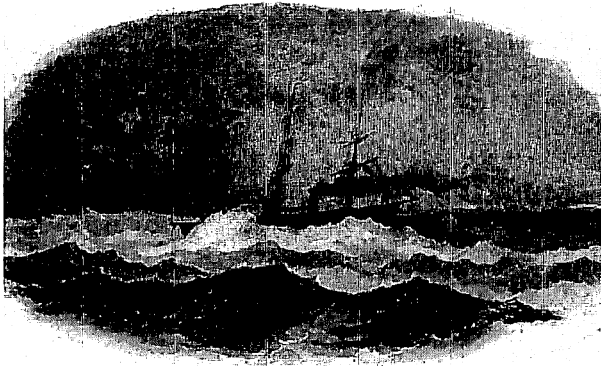
十月二十七日（一二・三）、曇。気温は低く、寒さを覚えた。早朝、川路はいつものように甲板の上を遊歩した。ニポール号にはクレールという若い医師が乗っていたが、何くれとなく親切にしてくれる。川路は離日前に厳父聖とと謨あきさより、くれぐれも健康に留意するよう、いわれていたが、航海中の健康管理をどうすべきかについて、クレールに尋ねると、「船中は運動を第一にすべし」といわれる。運動が少ないと、いろいろ病いを招くばかりか、食欲が減じる。今は厳冬なので、厚着をし、日夜、甲板の上を歩くべし、と注意された。

午前九時ごろ、甲板の上から四国の室戸岬むすし（室戸市南部）が見えた。ニポール号は快走をつづけ、一時間に十里あまりも走った。午後四時ごろ、強い西風が吹くようになり、帆が破れそうになる。波浪は高く、間断なく、波が甲板を洗い、時折、それが船室にまで入って来て、衣類などをすっかり濡らしてしまう。また時として頭に波をかぶることもあった。この日、船の動揺は今までになく甚しく、テーブルの上の器物が落下し、机の引出しまで飛び出るしまつであつた。それだけならまだしも、寝だなに体を伏せていても、船が大きく傾斜するたびに、体ごと投げ出される。これには一同ほとほと驚いたということである。

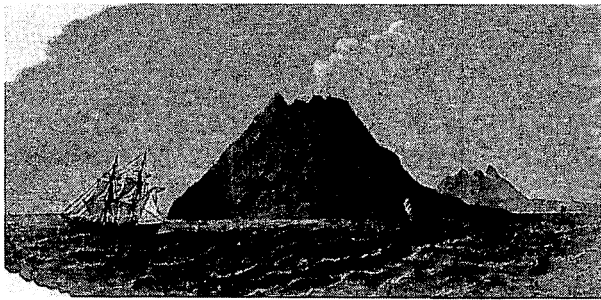
三等船室の松井源水の一行や支那人たちの様子をうかがってみると、皆船酔いに苦しんでおり、人間の顔色をしてはいなかった。夜八時ごろ、ニポール号は遙か洋上を航行中の蒸氣船を見たので、点火をもつてこれと交信した。

十月二十八日（一二・四）、晴。午前九時ごろ、薩摩の陸地が見えた。船の動揺は治まらず、波とうの高さは数丈もあるようである。ニポール号は右舷に薩洲の景色を、左舷にもくもくと煙を上げている硫黄島いざしま（大隅諸島、佐多岬さた

の南西約四十キロ)の火山を見ながら南下をつづけた。午後四時すぎ、日本の海域をすっかり離れ、東シナ海に出た。船の動揺は激しく、ニポール号上の日本人は、川路を除く全員が、船酔いのため臥せていた。そのため晩さんを摂るものはごくわずかであった。その夜、船は十五度から二十度まで傾いた。



航行中の郵便船

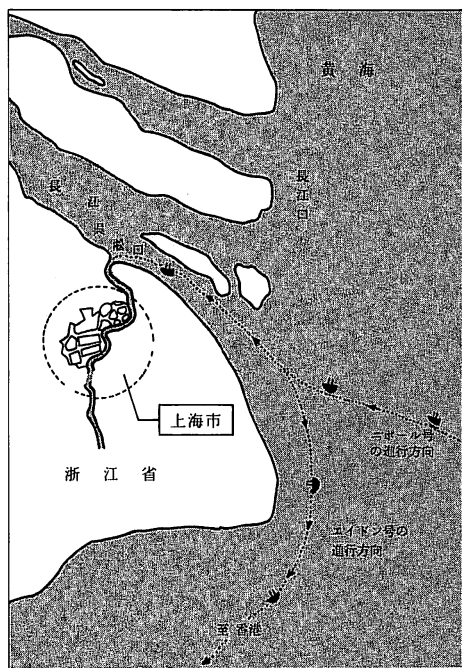


硫黄島の図

(『ザ・イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』より)

十月二十九日(一二・五)、晴。

昨夜以来の船の動揺は少しも治まらず、この日は揺れに揺れた。船の四方も見ても、満海一点の山を見ず、目に入るものは一望千里の海原——大きくうねっている荒波だけである。その中をニポール号は、第一の寄港地上海を目ざして走っている。荒天についての航海中も、川路は目にふれる諸器物の名称をイギリス人をつかまえては問い、また英会話などの個人教授などを受けた。おかげでこの頃では、日々の用事も通訳なしでも便



ずるようになった。しかし、口から出るのは、やさしい単語程度のことだけである。「然し誠に凡言のみにて彼より大に笑ふへしと思へり」と日記に記している。

横浜を出帆して以来、今日で五日目になる。が、毎日テールに出される牛や羊等の肉類にもそろそろ飽きて来た。川路などは洋食を好んだ方であるが、それでも三度三度肉類や油こい料理を出されては辟易するばかりである。日本人留学生たちは、皆国にいた時分よく口にした、沢庵や豆腐の入った味噌汁などを想い出すことが多くなった。

同行の三人（名前不詳）は、しきりに日本の食物を恋しがったという。

「明夜は、上海に到着のよし。然らば支那魚を買ひ、日本風の味になし、食せん。」

といった意見も出た、ということである。

おそらく、上海に着いたら、生魚を求め、それをさしみにして食べよう、との考えであつたのであろう。

この日、船長より

——明日の夜には必ず揚子江の口に到着するはずだ。上海には三日ほど停泊し、それより香港には五、六日で行け

ます。それよりシンガポールに行き、ペナン、セイロン、アデン、スエズ、アレクサンドリア、マルタ、ジブラルタル、ロンドンといった順路で行く予定なので、およそ四十日ほどでイギリスに到着するはず⁽¹²⁾です。との説明があつた。

十月三十日（二・六）、晴。午前一時ごろ、ニポール号は揚子江（Yangtze River）口の呉淞江^{ウーソン}に到着した。この河は大河であり、海と何ら変わらない印象を受けた。水の色はにごつており、茶色といったほうがよさそうである。夜が明け、視界が開けるころ、川路は望遠鏡を借りて江南の地（上海）を見た。このとき日本人留学生たちは、先を争うようにして甲板の上に出ると、めいめい上海の街の方を望んだものであろう。「船中の歓び一方ならず」（英航日録）にある短い条は、日本人の上海到着の喜悦ぶりを伝えて余すところがない。

早速、一同は荷物などを整えて着岸を待つことにした。川路の「英航日録」に、「第十時江の枝川に入り行く」とある。が、これは午前十時ごろ、黄浦（Hoang-Pou）をさかのぼり始めたということか。これにつづく文章は「兩岸の人家屋を並べ実に盛んなり。川の中西国川（隅田川）の一倍程なり」である。これは浦東（Pou-Tong）や対岸の英・仏・米などの租界の繁華と、上海市の前江である黄浦の大きさに驚いたということであろう。

上海は東西一里余、南北二里ほどの地である。そこに人家が充満していた。旧市街にあたる「上海滬濱城」^{シャンハイフウドゥン}の北方は英・仏・米の租界や支那人の市街を形成していた。家屋の数はおよそ十万ほどであつた。とくに浦江沿岸——現在の^{トシタミシレウ} 東大名路や^{チンセントニール} 中山東一路、^{チンセントニール} 中山東二路に、西洋館が百数十も立ち並んでいた。

午後二時ごろ、一同日本の服（幕府陸軍の制服）を着用し、腰に大小を差して^{さんぽん} 舢舨（小形の舟）に乗って波止場に上陸した。波止場には支那人が何人かいて、日本人のことを興味深く見たらしい。引率者ロイドには「横浜から

ロンドンまでの船旅における日本人留学生十四名の付随費用」(Incidental travelling expenses of the fourteen Japanese students on the voyage from Yokohama to London)と題するメモがあるが、それには、

Dec. 5 boats.....^s2. 50

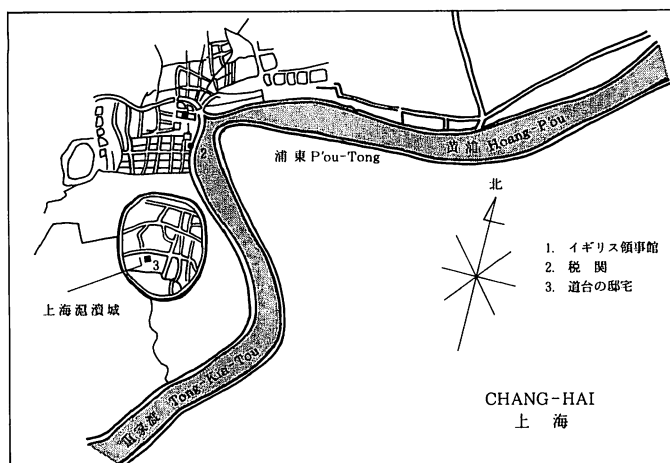
とある。これは舢舨の代金として、この日二ドル五十セント(メキシコドル)支払ったという意味であろう。

一同は上陸後、波止場で轎チャオ(肩輿)を雇い、それを用いた。上海の税関すなわち「江南北関」(江海関ともいい、イギリス租界内の漢口路に在ったもの。一八五七年(咸豊七年)に竣工した)⁽¹³⁾の前を通り過ぎ、黄浦公園に近いイギリス領事館(大英衙門)⁽¹⁴⁾を訪れた。時の領事ウィンチェスターと会い、次いで長老派教会の宣教師へボンとも会った。

それより一同は橋(苏州河にかかる蘇州橋か?)を渡り、蘇州(不詳)に至った。そこには洋館や支那人の家が沢山見られた。橋を渡るとき、通行税をとられ、英銭で二十五セント払ったという。日本人留学生は、その税の高いことにびっくりした。このとき偶然一人の日本人と会う。この邦人のことは、ニポール号のアメリカ人シェンリート(不詳)という者から、かねて耳にはさんでいたが、ゆめゆめ上海で同胞に会えるとは思ってもみなかったことであろう。

その日本人の名前は、

——岸田銀次



といった。

取締の川路は、同人について「其身分は元旗本の次男某にて、横浜に先年遊び、それより亜人（アメリカ人）に逢ひ、此地に至るよし。頗る書を能くし、詩文に通し、英語も能くなせり。性質至極宜敷相見ゆ」と、出自および人物・人柄についてふれている。

イギリス留学生たちが、図らずも上海市街で会ったこの日本人は、そのとき変名を用い、実名を名乗らなかつたものと思われるが、これは明治期のジャーナリスト・事業家として令名が高い岸田吟香（一八三三〜一九〇五）その人であった。美作（岡山県）出身の岸田は、元治元年（一八六四年）横浜居留地に住むへボンの家に寓し、『和英語林集成』の編纂を助け、また日本最初の新聞『海外新聞』『横浜新報もしほ草』などを編集したが、同年辞書印刷のため上海に密航したのである。この吟香の子が、洋画家として有名な岸田劉生である。岸田はふところから上海新聞を出し、「日本政府の御政体を賞したる処」を広げて見せたという。そして、近頃は支那の風俗は乱れ、政府の法令が行われず、盗賊が市中を徘徊していると、上海市中の状況を語った。

十一月一日（二二・七）、曇。霧が深い。留学生たちは、横浜出帆以

来、チョン髻を結っていたが、川路柳虹（太郎の子）が親しく父太郎から聞いたところによると、上海に向う航海中に一同断髪したとのことである。だが、ロイドのメモ「留学生たちの個人的出費」(Personal expenses of students)によると、ニポール号が上海に着いた日（陽曆十二月六日）に散髪代として七ドル（メキシコドル）支出し、各留学生に十ドル（小遣い）渡したことが判かる。メモには、

1866	Shanghai	
Dec. 5 th	Haircutting	\$ C 7.00
	\$ 10 each student	140.00

とある。

真実はどうあれ、一同が上海に到着した時点で、皆「散切り」^{さんきり}となったことだけは確かなようだ。

この日の朝、一同は軍服を着て、ロイドと共に市内の写真館に行き、一緒に記念写真を撮った。ロイドによると、写真は大型二枚が將軍慶喜に、同一枚はパークスに、小型十七枚が贈物として、関係有司^{ゆうし}（役人）に送られた。⁽¹⁵⁾これは、上海およびロンドンに着いたら、写真を送るよう大君（將軍）から命じられていたもので、その命を忠実に履行したまでのことである。

しかし、この日の撮影は失敗したので、翌日撮り直しとなった、という。⁽¹⁶⁾先のロイドのメモによると、代金として五十一ドル（メキシコドル）支払われている。

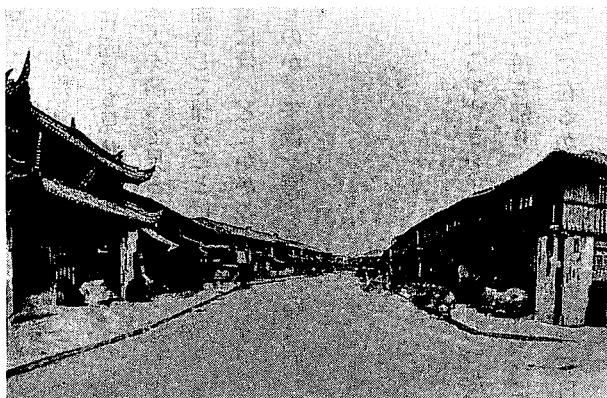
ロイドは、写真代その他について――

7th photograph (…………) [……は判読不能]

by order of Tycoon 51.00



1870年代の黄浦（『上海フランス租界史』1928年刊より）



1870年代の上海南京街（『上海フランス租界史』1928年刊より）

と、記している。

当時、写真は高かったようだ。

ともあれ、一行が上海で撮った写真を見ると、皆断髪であり、一様に幕府陸軍の制服を着、将士用の陣笠（木製漆塗り）と大刀を手にしている。剽悍な面だましいのサムライたちの中にあつて、ひとは異彩を放っているのは、大六（十二歳）

である。ロイドに抱えられるようにしてすわっているその姿と面差しには、まだあどけなさが抜け切らないでいる。

写真館を出て、帰船しようとなると、一行は支那人数名に囲まれる。このとき「一個の書牘（しよとく）（手紙）を出せり」ということだが、上海で発行されていた中国語の新聞でも見せられたものか。それには、「今日上海城中有札拝請（チンジ シヤンハイチンチヨリイバイチン）日本人着見」（街中でミサを行っている時、日本人を誘って見る、の意）と記してあった。皆、上海滬濱城に行ってみようと思ったが、ロイドが同行していたので謝辞して帰ることにした。支那人らは、日本人が帰る、というところ、がっかりした様子を見せたらしく、日本人を慕う情には、どこかわいいところがあつたらしい。

その後、一同はいったんニポール号に帰ったものか。午後一時すぎ、川路は同じ取締の中村敬輔とともに上海市中を遊歩している。古来、支那の

——松江之鱸（しようこうのろ）

は詩歌に詠われるほど有名である。

川路・中村らが再び上陸したのは、呉淞江でとれるすずきを求めることであつた。

方々搜したあげく、ようやくそれを見つけ、船に持ち帰り、食事のときさしみにして食べたようである。「喰するにその味甚た妙、頗る故国の食味に似て日本の地方に在るかと思ふ」（「英航日録」）と、久々に日本の味に似たその味に舌鼓を打っている。

兩人は市街を歩き回り、上海市民の暮らしぶりなどをあれこれ観察する。市中の家々には、蜀の名將関羽の像が見られ、家人はそれに灯明をあげ、しきりに拝んでいる。時々、通行人をつかまえ、たどたどしい英語で尋ねてみるが、一向に意は通じない。こちらも中国語は話せないで、やむを得ず筆を執って筆談に及ぶ。諸処を徘徊できるのも筆

談のおかげである。身分が卑しく、貧しくとも、まれに能筆がいる。川路はそれを見て、さすが「文化の国驚入おどろこまり候」と感嘆の声を上げざるを得なかった。

しかし、市街のそこかしこに物乞いがある。卑賤の者も多く、川路らは付きまとわれ、これにはほとほと困ったという。また上海は、諸物価が高いことがわかり驚いた。波止場より本船までの舢舨の料金として、一ドル十五セント（日本の約一朱に相当）も要求された。

川路と中村は、帰船の際になかなか面白い経験をしている。

日が西に沈むころ、二人は舢舨に乗る。

船頭に向って、

「ニポール号にやってくれ」

といった。

このときは片言の英語を用いたものか。舟は浦江の川上に向って進むのだが、いつまで経ってもニポール号には着かない。

二人は驚き、

「いづれに行くのだ？」

と問えば、

「ニポー」

と相手は答える。

川路と中村は、船一隻も目に入らぬ所に連れて行かれるため、だんだん腹が立ち、再び、

「どこに行くのだ？」

と語気を強めて問うと、こんどは

「ニポール」

といった。

船頭は、ニポール号を寧波(ニシボオ) (浙江省北東部の町、杭州の東南東一四〇キロ) と聞き違えたのである。二人はすんでのことで、とんでもない所に連れてゆかれるところであった。

兩人は夜になるころ、ようやくニポール号に帰ることができた。

十一月二日(一二・八)、この日の午後、億川、市川、岩佐、箕作大六ら四名は上陸し、買物などするのだが、言葉が通じず困っていると、英語のわかる支那人が来たので、ようやくそれを通訳として用をすまうことができた。それより「松風閣(ソウフオン)」という酒家に入り、茶菓子を喫し、食事などをした。代金は一元(一メキシコドル?)であったという(「英行日記」)。

また当日、川路、中村、伊東(?)、ロイド、イギリス領事館書記官らは、上海滬濱城に道台(グオタイ) (行政長官)を訪ねた。このときの道台の名は応宝時(インバウシ)といい、ひじょうに温和な人であった。川路らが上海道台を表敬訪問する気になったのは、シナ学者であった中村敬輔の希望によるもので、ウィンチェスター領事が紹介の労を取ってくれた。

川路はこの日の朝、ニポール号で入浴するつもりであったが、洋式の湯ぶねを初めて見て奇異の感に打たれ、(これに入るときと風邪を引く)

と思われたので、手足だけを洗い、体を洗わなかった。
午後、川路、中村、伊東（？）、ロイドら四名は、道台を訪問するに先立って、肩輿に乗り、まずイギリス領事館を訪れた。

同領事館の書記官が案内役となり、一同再び肩輿に乗ると、市街（城外）を過ぎ城門に至った。このとき清国人のかごやは、あまり扱い方がうまくなく、「稍もすれば駕より投出されん位」であった。⁽¹⁷⁾

やがて一同は、弓形の第一門に入る。城内には隘路^{あいろ}がある。その両側の家はどれも貧しい。道は狭い上に汚なく、思わずため息をついた。うねり曲がったような路を通り、さらに城門を三つ、四つ過ぎると、「東轅門^{トイエンマン}」「西轅門^{シイエンマン}」

と記した額のある中門に至り、その手前で肩輿からおりた。

このとき支那の官吏一名が出迎えた。が、その人こそ上海道台の応宝時であった。川路は、この官吏について、「道台は鎮台と均しきものにて、其位三品^{そのくらいさんはん}（第三位の意か？）、蘇州松江の二省を支配するものなり」（『英航日録』）と記している。

一同はそれより石畳の上を歩き、前殿に至る。建物も瓦もひじょうに古い。殿裡にテーブルと椅子があり、一同はそこに案内されると着座した。道台との会話は、中国語に通曉し、漢詩文をも作れるイギリス領事館書記官（W・G・ストロッチのことか）の通訳で行なわれ、日本人は時に筆談に及んだ。



香港の轎（肩輿）の図

（J. トムソン『支那・インドシナにおける
10年間の旅』1877年刊より）

中村は安井息軒（一七九九～一八七六、幕末・維新期の儒学者）の著述『管子纂註』を、川路は浅野梅堂（一八一六～一八八〇、幕末・明治初期の文人画家）の書画を数枚道台に贈ったところ、この高級官吏はたいそう喜び、「他日拙作一篇を似て謝せん」といった。

中村、川路らは道台に贈るような手土産をもってはいなかったので、たまたま持ち来れる漢書と書と絵画を贈物としたものである。

しばらくするとまた奥殿に導かれ、そこで酒肴の供应があつた。おそらく、酒は味淡泊にして香りのよい黄梅酒、肴は「雲片糕」と呼ばれる米で作った菓子であつたものか。酒宴が終つて帰ろうとするとき、道台は川路らに新刊の詩文集五巻を贈った。

午後六時ごろ、川路らは帰船した。大六の「英行日記」によれば、取締一行の帰りがおそかつたので、上海から香港に向う船に乗り移ることができなかった、という。同夜、ヘボンの家で会つた日本人——岸田銀次、三郎（不詳）、田中広太郎（不詳）らがニポール号に別れを告げに来たが、皆望郷の念を起こしており、「故国の人を慕ふの情」がまざまざと感じられた。

ロイドのメモによつて、この日の支出を見ると、道台訪問の際に用いた肩輿の代金八ドル、ニポール号のボーイのチップとして十六ドル（メキシコドル）支払われている。

十一月三日（一二・九）、晴。ロイドからこの日別船に乗り替える旨、伝えられていたから、一同午前八時ごろ行李を整えたのち、船長の部屋を訪れ、航海中の礼を述べて香港に行く郵便船「エイドン」(Aden)号に乗り移つた。

香港の英字新聞『ザ・チャイナ・メール』紙 (*The China Mail*, 一八六六・一二・一三付) によると、この船は P & O 汽船会社 (火輪船公司行 Ho-lun-shuen-kung-se-kong) の蒸気船で、八百十二トン。船長の名前はアンドルーズと
いった。

川路は同船について、「此船大きき殆^{ほと}んど先に乗来りしニポールに均し。船中甚^{はな}た美麗なり」と日記に記している。
『ザ・チャイナ・メール』紙 (一八六六・一二・一三付) の「船舶情報」(Shipping Intelligence) によれば、エ
イドン号の主な荷物は「郵便物^{メイルズ}」であり、その他乗客として次のような人々を乗せていた。同紙の「乗客」(Passen-
gers) というコラムには、次のようにある。

ロイド師と召使い

カニングガム氏と召使い

ロウヴズレー

ボードと召使い

クラツケス

レイと召使い

ルカス

ナット (?)

グラント

クローフォード夫妻と召使い

アーサー・コクスン夫人とヨーロッパ人の召使い
エヴァンズ } 子供 (?)
ゴードン }

幕府イギリス留学生 (上)

マホメッドボーイと召使い

アレンと召使い

J・ガードナー大尉

E・プリオズ(?)と召使い

十四名の日本人士官と日本人奇術師九名

支那人七名

(?) および傍点は筆者による

川路は「同船の客英商人五六名亜人(アメリカ人)二名、その内夫婦連兩人あり。外に印度の行商一人乗組みたり」(「英航日録」)と述べている。

エイドン号に乗り移った一行は、へや割りにかかるのだが、二名ないし四名が一部屋に入ったという。日本人同士が部屋を同じくするのはよいが、岩佐などはインド人と同室になってしまった。頭に白いターバンを巻き、色黒の同人は、金持ちの商人(マホメッドボーイか)であったようだ。このインド人は、

「こんど大金を出して一等室に移る」と豪語していた。

しかし、同室者の岩佐からは嫌われたようで、「印人の汚穢おわい甚た当惑せり」と不平を鳴らしている。大六は、成瀬、市川らと同室であった。当日の大六の日記には、

(餘瀝)

三日朝飯後舟を乗替へる同室の人数瀬市川弟の三人此度船の名エーデンと云ふ婦人二三人乗組居る十一時頃上海出航

とある。

川路によると、エイドン号は午後二時ごろ上海を出航し、一路香港に向った。日本人は、こんどの航海では他の外国人といつしよに食事をするのができなかったようだ。だが外国の風俗の一端を知る機会にめぐまれる。船中では白人の女性が優先され、食事のときは主人よりも先に、しかも上座にすわる。イギリス女性は尊大にふるまい、そのしぐさときたら日本の王姫のようであった。

十一月四日（二二・一〇）、晴。エイドン号は、香港を指して快走をつづけていた。仏暁、川路はいつものように甲板の上を遊歩した。が、船は激しく動揺した。終日、右舷に支那大陸を望んだ。この日、船三隻を見た。

乗客の中には船酔いに苦しむ者が多かったが、川路はそれに悩まされることもなく、食欲も至って旺盛であった。食事のとき困つたのは、メニューを見ても何の料理か判らなかつたことである。ボーイから、

「何にするのか？」

と聞かれても、会食中の者の皿を見て、それと同じものを指差すしかなかった。

西洋人同士の会話も「十語の中一語を解するのみ」というから、所々単語がわかつた程度であろう。

浙江省の陸地を右に望みながら南下をつづけ、島嶼（小さい島）が眼に入るところ、中村敬輔は次のような七言絶句を詠んだ。

昨夜松江解纜帰　昨夜松江より纜を解きて帰り

水光波影入房幃　水光（水面に輝く月の光）波影房幃（船室）に入る

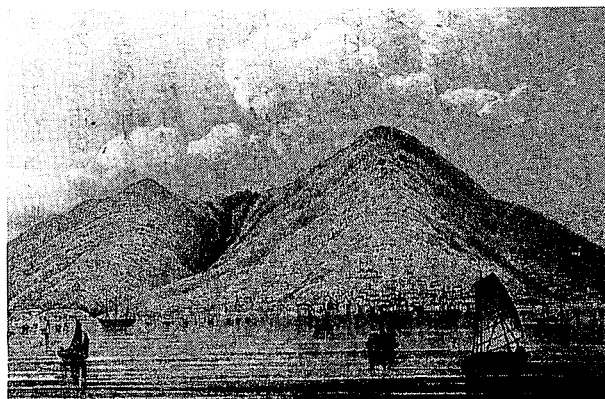
回首蘇州知何処　首を回ぐらせども蘇州何処か知らん
只看天涯有鳥飛　只看る天涯（遠い所）に鳥の飛ぶ有るを

十一月五日（二二・一一）、晴。この日も終日、右舷に大陸を、また船三隻を見た。この日の川路の日記の記事は、船中の白人、とくにイギリス人の權威についての感懷で埋められている。船のボーイなどは、ヨーロッパ人乗客の言うことをすぐ聞くのに、日本人の頼みとなるとすぐ聞かず、粗略に扱う。支那人に至つては、どんなに金を積もうと英船では、一等船室に入れてくれないのである。川路はこう考えた。——日本人に權威なく幅がきかぬのは、わが国に海運力がないからである。日本は一日も早く海軍を起し、郵便船を造り、日本人乗客を乗せて世界の海に乗り出せば、国威や邦人の權威もおのずから上るはずである。なるほど支那は大国である。が、一隻の軍艦もなく、ヨーロッパ人に侮られ、その風俗は乱れ、退嬰的である。上海の住民を見ても、貧しく、愚昧の表情をしている。上海城（滬瀆城）の城壁は、砲弾一発あれば簡単に撃ち抜ける。

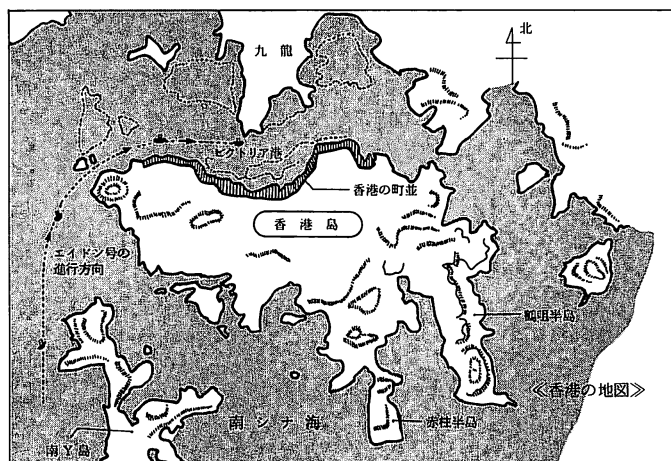
将来日本は、海運を盛んにし、海外に雄飛せねばならぬ。二、三十年後、東方の大島（日本のこと）を一つのヨーロッパとせねばならぬ。……

川路は列強の触手が伸び、その圧力に屈している日本や支那の現状をかんがみて、将来あるべき国の姿、アジア民族の勢力が伸張して、白人にもその勢いが及ぶ時代が訪れることを希求している。

十一月六日（二二・一二）、晴。南に向つていけるせいか、暖気が増し、今日は暖かい。日本の四月中旬の陽気である。ラシャのシャツを一枚着、運動すれば汗ばむほどである。海も穏やかである。



19世紀中葉の香港島の図
(G. スミス師の著書より)



午前九時ごろ、遠方に青い山々を見た。船が香港に近づきつつあることは自ずと判かった。午前十時ごろ、エイドン号は香港の入口あたりに達した。港口の両側（九龍と香港島）に山が連なっており、二里ほど進むと入江、さらに三里ばかり迂回して港内（「維多利亞港」 Victoria Harbour）に到着した。このとき港内には大小百隻ほどの船が停泊していた。あたりの景

色は非常によく、兩岸に洋風の家が立ち並んでいる。大六は、香港島の波止場地区を形容し、「実に絶景にて江都（江戸）両国橋の近所の様」と日記に記している。一同、この日は上陸せず、船内で泊まった。日本人は甲板の上から、四方の景色に眼を向けたことであろう。川路などは香港島の地勢に逸早く注目し、同島には平地少なく、山の方に沿って市街が開けていることを知る。

香港が旅人の心をなごませ、目をたのしませてくれるのは、今も昔も夜景である。海岸地区にはガス燈の灯が見られ、また灯火は山腹にまで点々とし、それはまるで螢の光のようでもある。その美しさは言葉にならなかった。川路はいう。「夜分兩岸の燈火山の中腹^{やま}まで満ちて螢火^{けいか}星羅^{せいら}（星のようにちらばる）と云ふへし、其の景絵^{けいゑ}にも尽くしたし」（「英航日録」）。

十一月七日（一二・一三）、晴。午前九時ごろ、日本人留学生らは香港島に上陸した。ロイドのメモによると、この日、舢舨と肩輿の費用として三ドル支出している。当時の地図を見ると、香港島には「パレード波止場」（Parade Wharf）と「ペダーズ波止場」（Pedders Wharf）と呼ばれる棧橋が二つあったことが判かる。大六の「英行日記」に、

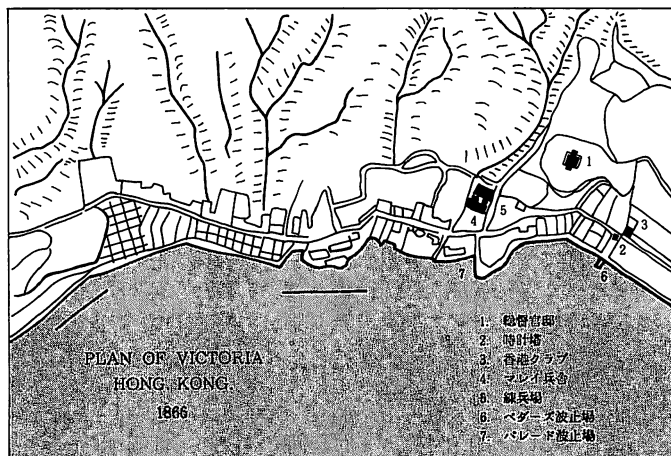
七日朝第九時上陸市中見物をする。高さ百三十五^{（フット）}ヒート斗里^{（ばかり）}なる塔（時計塔）あり。其頂^{（いただ）}上る（後略）

とある条から考えると、一同はペダーズ波止場に上陸したのではなからうか。

この棧橋のすぐ目の前に「時計塔」（Clock Tower）があるからである。一同はその頂上に登って、市街を見渡し



香港の時計塔の図
(J. トムソン『支那・インドシナにおける
10年間の旅』1877年刊より)



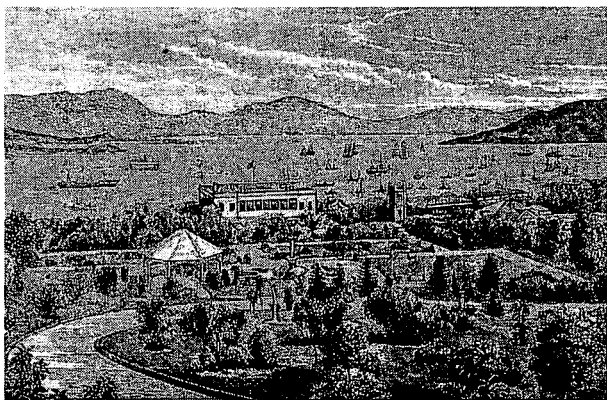
たことであろう。留学生らはお昼ごろ、いったんエイドン号に帰船し、午後一時ごろロイドと共に再び上陸し、英華書院（Ying-wa-shuyun）を見学に訪れた。

英華書院というのは英名 Anglo-Chinese College といい、イギリス伝道協会のジェイムズ・レッグ博士 Dr. James Legge が、一八四三年に創立したミッション・スクールである。文久二年一月九日（一八六二・二・七）、文久遣欧使節団（竹内下野守の一行三十六名）の随員らも同所を訪れている。院長のレッグス博士について、川路は次のように素描している。

学校の先生、歳六十位の老翁、英の大学者なり。漢文清書とも能くし専ら漢学を成し居ると見えたり。何年漢書を学び居るかと問ふに、廿五年來此地に來り漢学せしといふ。この老人の著述、四書並びに書経、五車韻府（五車韻瑞——中国の類書、明の凌雅隆撰）等の英文と対訳せるものあり（後略）

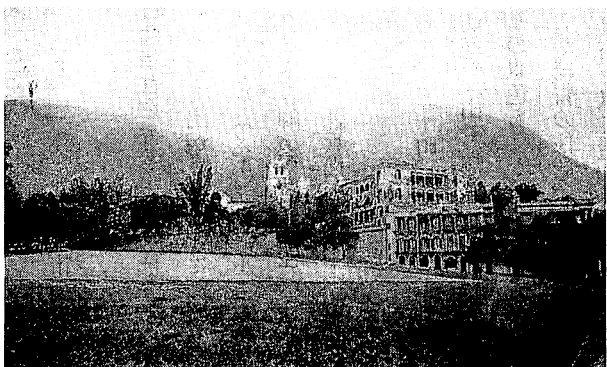
一同はある一室に入ると、その書棚に和書や本草学の書籍などが並べてあつた。それより学院の付属印刷所に案内され、一日に千枚も刷るといふ大きな印刷機などを見学した。英華書院には鉛製の漢字の活字も備えていたという。一同は、洋式の印刷機が実に巧みに摺立てるのを見て驚嘆したようである。

英華書院を出た一行は、「英歩兵屯所」を訪れた。これは「マレイ兵舎」（Murray Barracks）を訪問したということであろう。ここでは第二十連隊のブルーン大佐とロイドの友人（士官）⁽¹⁸⁾らが一行を出迎え、訓練を見せてくれた。その様子を大六の「英行日記」からひくと――、



香港総督官邸と花園の図

(J. R. ヤング『グラント將軍の世界周遊旅行』1879年刊より)



香港島の練兵場

(W. A. D. マーティン『支那の目覚』1907年刊より)

調練は幅三間、長さ二十間ほどの空地(写真参照)で見物したものだ、指揮官の号令のもと一大隊の歩兵が整然と動くさまを見て感心した。その中にグウルメットという士官がおり、窪田泉太郎(不詳)の友人ということで、いろいろ同人についてうわさをした。

それより一行は、ガス工場・電信局・香港クラブ(新公司)などを見学

数百人の足音^{あとか}も一人の如し大鼓笛ラツパ等相入面白くして見物人の体動^{からだ}く程なり

したようである。ガスランプや電信には大いに驚いたと述べているが、日本に電信などをひけば、きつと賊（攘夷派）に電線を切られてしまうに違いない、と語っている。一行はさらに市街を遊歩したのち、夜八時ごろ帰船した。大六はその夜、故国に宛てて手紙を書いた。

十一月八日（二二・一四）、晴。ロイドが、今日は諸君を香港総督の官舎（大兵頭写字楼）に案内する、ということとで、一同、幕府陸軍の制服（金筋の入った筒袖）を着て出かけることになった。午前九時ごろ、上陸したものか。ロイドのメモによると、総督官邸まで肩輿を用い、九ドル（メキシコドル）支払ったことが判かる。

当時の香港総督はリチャード・グレイブス・マクドネル卿 Sir Richard Graves Macdonnell（一八六六年〜七二年まで在任）である。総督官邸（Government House）は、練兵場の上手——山腹に位置し、ヴィクトリア港を俯瞰する高台にある白亜の三階建ての家である。

川路によると、総督官邸までの距離は、海岸から二、三十町（約二、三キロ）。山を切り開いたような道を肩輿にゆられながら昇って行つたが、江戸の芝にある切通^{きりどおし}（山や丘を切り開いて、道路としたもの）のようであつた、という。坂道には鉄製の欄干が設けてあり、あたりの景色もよかつた。四方の山には大きな木などは見られない。しばらくすると大きな石門のある家に至つたが、ここが総督の住居であると教えられた。川路はその官邸を「宮殿楼閣（高く立派な建物）盛大可驚^{おどろく}、居室皆我邦^{わがくに}のミカゲ石を以て造れり」と描写している。

ロイドに伴われ、一同邸内に入ると、六十年配の白髪の温和そうな老人が、細君とともに出てきて、いろいろ歓待してくれた。マグドネル卿は日本人を珍しく思い、ことに腰に差している大小や軍服をたいそう細かに見たという。とくに川路は、「刀を見せて欲しい」と懇望されたので、抜いて見せると、相手はひじょうに悦んだということであ

る。

それより一同は官邸の外に出ると、花園を見、またヴィクトリア港に停泊中の世界各国の船舶を眼下に見渡した。やがて帰途につくのだが、マグドネル卿は日本人一行を門の外にまで見送った。

この日の午後四時ごろ、一同エイドン号を下船し、イギリスの蒸気船「エロウラ」(Elora)号に乗り換えた。が、午後五時ごろ再びエイドン号に帰っている。これは同船の船長が日本人一行のために送別会を催してくれたからである。

十一月九日(一二・一五)、この日、留学生一行は、三百馬力の小型蒸気船エロウラ号に乗り、一路シンガポールを指して、午後二時ごろ香港を出航した。大六の「英行日記」はいう。

九日午後第二時出艘西南江走る第四時頃より舟動揺する事甚し此日一昼夜三百余里^{西洋}里数^数走る。

十一月十日(一二・一六)、晴。気温摂氏約二十三度。浪荒く、たびたび甲板の上にまで打ち上った。川路が船長に本船の位置を尋ねたら、正午の天測によると、

北緯十八度五十分

東経百十一度五十六分

である、と教えてくれた。川路は「之をきいて赤道近傍にあるを知りて驚きたり」と日記に記している。

日本人は、遙かかなたに海南島を望み、また海上に飛び魚の姿を見ながら南シナ海を南下した。動揺は激しかった

が、エロウラ号は快走をつづけた。この日、川路は次のような漢詩を詠んでいる。

極目四方唯大瀛

目を極きむれば四方は唯ただ大瀛たいえい（大きな海）

移来針路直南行

移うつり来きつて針路ひだ直ただす南みなみに行く

玻璃窓上被波没

玻璃あかり（ガラス）の窓上波を被おほつて没もつし

一瞬時間昼夜生

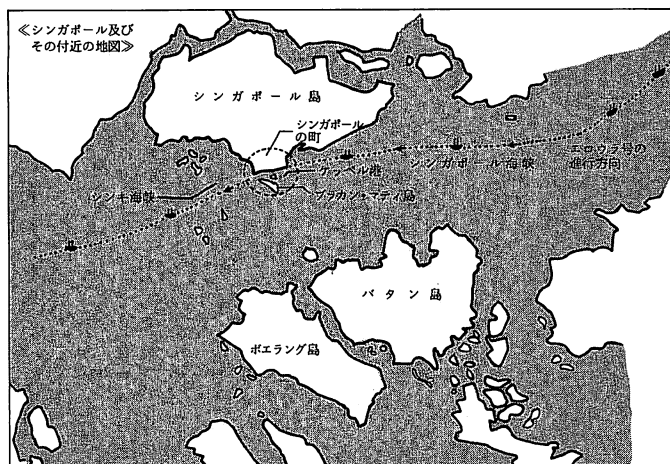
一瞬ひとしなにして時間昼夜を生なず

十一月十一日（二・一七）、昨日につづいてこの日も波浪高く、船は動揺した。この日、東の方向に船一隻を見た。夜、甲板に出てみると、大きな波しぶきを浴びてしまった。

十一月十二日（二・一八）、正午の本船の位置——北緯〇八度五十一分、東経百〇八度。エロウラ号は赤道に近づきつつあった。快走をつづけ「順風舟はなは甚はなはた速はやし」と、大六は日記に記している。

十一月十三日（二・一九）、すでに日本人はこの頃になると暑さにはて、けだるさを覚えたものか、「夜来炎熱甚酷おと凡ふつそわが六月暑中なり。全身たるくして疲れを生ず。同行人困惑せるもの少からず」（「英航日録」）と、暑氣あたりについて記している。

船中、日本人留学生は、時折、他の乗客らと話をするこもあつたようであるが、一行中の人気者は何人といつても十二歳の大六少年である。語学に対する特異な才能に恵まれ、おぼつかないながらもイギリス人との会話を試みたものか。箕作秋坪の子弟（奎吾、大六、佳吉、元八、直）は押し並べてできが良く、俊秀ぞろいであつた。一行の英



語の学習は、横浜出帆後も船中において行なわれていたが、進歩がいちばん著しかったのは算作兄弟（奎吾、大六）であった。川路は、

「同行中算作阮甫の孫大六は年十二、利発の性なれば英人も殊^{こと}のほか賞愛し同行人の話出つる度毎には必ず大六の話てたり」（『英航日録』）と述べているように、大六の才知に瞞目している。

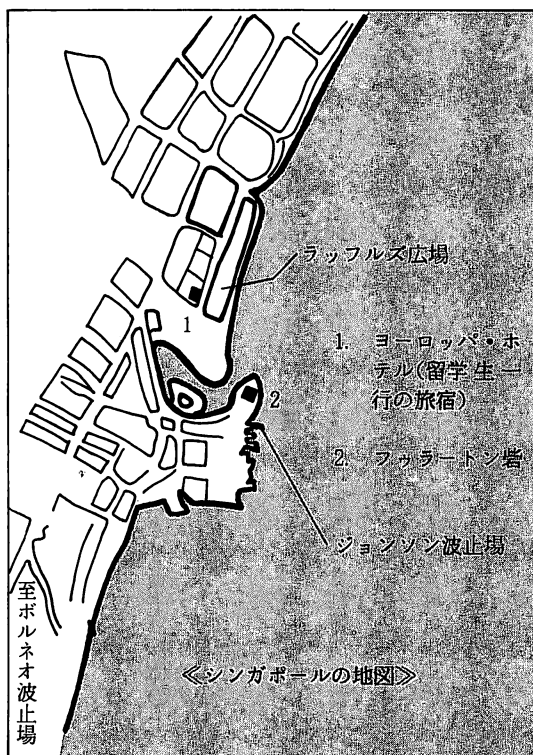
十一月十四日（一二・二〇）、午後一時ごろ、エロウラ号はシンガポールに到着し、午後二時ごろ、一同は上陸した。海岸には大木が生い茂っており、人家は皆洋風である。川路によると、土人は皆半ば裸体の上、顔色は真つ黒であつたという。こうした現住民（マレー人）は日本人には妖怪のように見えたらしい。

上陸後、一同は「辻馬車^{ガリ}」(ghari)を雇い、ひとまず旅宿に向い、投宿することにした。当地に着くと、皆、炎天下にさらされ難渋したが、ここまで無事に來れたことは喜ぶべきことで、川路は「苦中の快といふへきや」と日記に記している。ほどなく一同は、四人乗りの辻馬車に分乗する。御者は現住民である。日本人一行を乗せた馬車は、市外の旅宿に向つてゆつくりと動き出した。途中、市街の様子にも注意を向け、いろいろ観察する。



シンガポール港の図

(J. トムソン『支那・インドシナにおける
10年間の旅』1877年刊より)



——道路は清潔であり、馬車が縦横に行き来している。四、五十間(約八、九十メートル)ごとにガス灯がある。所々に羊が草を食んでいる。珍しい鳥も多く、羽根も美しい。土は赤土である。物産は果物だけが多いようだ。……日本人一行を乗せた辻馬車は、やがて海岸から一里半ほどの所にある旅館に着いた。川路は旅館について、

「この旅店^{ほて}殆んど石室一層の楼上下五十余の室あり。欧風の家にしては甚た粗末なり」(「英航日録」)と述べている。川路の日記には、ホテル名まで記されていないが、大六の「英行日記」に「二時頃上陸馬車にて仏ホテル Hotel D'Europe 江行へ」とあり、日本人留学生らが旅装を解いたのは Hotel de l'Europe であったことが判かる。

この「ヨーロッパ・ホテル」は、ラッフルズ広場に面し、ボルネオ波止場から三マイル(約四、八キロ)の地点にあった。

一同は旅宿に到着後、部屋割りをきめたが、大六は億川と同室となった。その後、日本人らは辻馬車に乗り、市中に買物に出かけたようである。「英行日記」によると、ロイドはイギリス婦人二名、岩佐、億川らを伴って買物に出かけている。しかし、当のロイドは日本人留学生に、いたずらに買物などして金を使うことを戒めている。その理由として、寄港地の物価が高いこと、ロンドンに行けば善美の品もあること、学業が始まれば必要な品を求めねばならぬので、あまり散財するな、と云っている。

十一月十五日(一二・二二)、晴。この日もひどい暑さで、気温は摂氏二十九度もあった。午前七時ごろ、日本人留学生らは、ロイドとともに辻馬車に分乗し、プラス・バサ街の監獄^{ヤ・コンシクト・シエル}見学に赴いた。シンガポール総督オルフル・ギヤベナ大佐も馬でやって来て、共に案内して獄内に入った。

「牢屋はいづれなり」

と聞いても、別に牢屋はあるでなし、各棟の中で囚人が作業をしているだけである。

蒸気仕掛けの建物、石や木を切っている建物、藤や竹細工などを行っている建物がそれぞれあって、約二千名ほどの囚人が罪の軽重により各建物の中で労役に従事している。模範囚は、その等級に応じて五十セントから五ドルまで

の給金が与えられ、獄内の役人（監視人）となり、月一回塀の外に出ることができるというのである。

重罪の者（海賊・人殺し）は永牢にして、主に器械などを扱い、罪の軽い者は日々、藤や竹細工その他の製作に従っている。監獄の役人は三人。獄吏として兵卒が十二人いるだけで、あとは行状のよい囚人に罪人の監督をまかせていた。監獄は清潔であり、風通しもよく、日本の牢屋のように悪臭などはなかった。一同は本国のものと比較して、そのととのつた諸施設や監理体制にたいそう感心した。

案内のイギリス人は、

「この監獄の仕方、遂一大君（將軍）に申上なは^{おおい}大に御益なるへし」と語った。⁽¹⁹⁾

この日の午後四時ごろ、一同ロイドとともにシンガポール總督の官邸を訪問した。總督の家は、かわらで屋根をふいたなかなか立派な建物であった。が、香港總督の官邸にくらべると、美しさの点で劣っていた。けれど炎暑の最中、涼気があり、日本の六月の陽気の中にいるような気がした。

總督は温良な人物で、日本人一行を親切にもてなした。この人は、イギリス陸軍の將軍としてインドに駐在していたとき、戦闘に参加し、足に銃創をうけ、そのために足を切断した。このときは文官となっており、松葉づえをついていた。書記官もまた元傷痍軍人であり、右の中指はなかった。日本人は兩人の話聞き、イギリス政府が戦闘で負傷した軍人を文官としたことで、面目を改めたことにすっかり感心すると同時に、兩人をもってシンガポールを治めさせているのは、イギリスの覇権があまねく天下に及んでいることの証左と受けとった。

それより一同は官邸の外に出、花園を見たり、港灣風景などをたん能したが、その景色のほうは香港よりも劣って

いた。

十一月十六日（二二・二二）、午前八時十五分ごろ、一同ロイドとともに辻馬車に乗って砲台見学に出かけた。日本人留学生たちがこの日の朝訪れたという砲台は、フウラートン砦（Fort Fullerton）のことであろう。この砲台は、

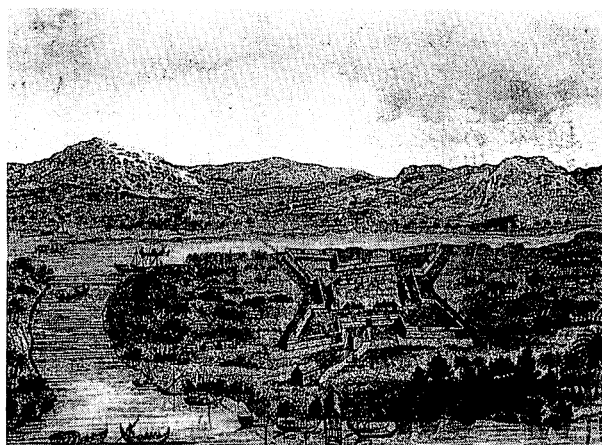
シンガポール川西岸河口の突端の地に位置するイギリス要塞（現存しない）でもあった。

川路は、このイギリス軍の砲台を「英航日録」の中で、次のように描いている。

「五稜廓（さし絵参照）にして内の家々皆煉瓦を以て製せり。其大砲の高士官等諸方を案内して看為せしめたり。此城内礮五十門十八斤十二斤六白砲なり合藥英之十萬斤我二十萬余を備へりと云ふ。此の盛大なる新嘉坡にして礮台存外粗ななり。併し乍ら地理は誠に宜敷凡そ海岸より直經三四町離れ港内の泊船はくせん（泊舟）一望にして尽る。」

日本の一介の留学生が、各国の総督に面会し、砲台見学を許されるほど厚遇を受けるのはなぜか、と川路はこの日自問している。それは政府（幕府）や父祖のあついでぐみのおかげであると考え、いつそう報国の念に燃える。

午後二時、一同は再び辻馬車に乗って海岸に戻り、それよりエロウラ号



セイロン島トリコマリの五稜廓の図

（R. パーシバル『セイロン島物語』1803年刊より）

に帰船した。同船は午後三時ごろ出帆し、針路を西北に取った。次の寄港地はペナンである。

シンガポール滞在三日間で、一行が使った金の明細は次のようになる。⁽²⁰⁾

十二月二十日（陽曆）……………辻馬車と雇夫　　二ドル二十セント

同二十一日……………辻馬車と雇夫　　十ドル

同二十二日……………皆見物のための辻馬車　　五ドル

ホテルの勘定　　百二十二ドル十七セント

給仕その他　　八十三セント

ボーイと雇夫　　二ドル五十セント

蒸気船の雇夫　　一ドル

計二百三十三ドル七十セント

この中で一番の出費は、ヨーロッパ・ホテルでの約百二十三ドルであり、川路はその宿泊料の高さに「驚し、」東海道本宿米代の比を以て論じ難し。欧羅巴は如何ならんと物価の高値驚きたり」（『英航日録』）と、欧州において予想される諸式の高さを大いに憂慮している。

その夜、留学生らは月明りのもと、甲板の上で涼を追った。

十一月十七日（一二・二三）、午後になると陸地が視界から消え、船を三、四隻見るだけにとどまった。

十一月十八日（一二・二四）、午前八時ごろ、エロウラ号はペナン Penang（マレーシア北西部の港町）に入港した。が、操船を誤り、砂州に乗りあげ動かなくなる。お昼ごろまで身動きができず、満ち潮になってやっと動かすこ

とができ、ようやく投錨した。午後二時に出帆と聞き、上陸の暇はなかったので望遠鏡をもって陸地を見るしかなかった。

ペナンは連山の草木が繁茂し、景色もよく、果実などを多く産する、と聞かされる。未開拓の土地は多く、住民も少ない。大きな建物はわずか六軒ほどしか目に入らない。現住民の皮膚の色は黒く、目はらんらんとし、「実に一箇の妖怪」のような印象を受ける。当地の人間はシンガポールで見た土人と何ら変わるところがない。……

午後二時、エロウラ号は西南を指してペナン港を出帆した。夕方、船内の食堂は花木かばでもって飾られ、天井には英國国旗が張られた。聞けば明日は「切里斯都」の祭日とのことである。

十一月十九日（一二・二五）、晴。今日は少し涼しく、午後三時ごろ左舷にスマトラ島を見た。この日はキリスト降誕祭に当たり、船内の壁もすべて花木で飾られ、夜になると灯火はもとより、支那の提灯などをともし、御馳走が供された。

支那の提灯テイトンは、日本の提灯のように紙にて張り、長さは一尺（約三〇、三センチ）、ほとんど小田原提灯（折りたたみできる細長いちようちん。天文年間、小田原の甚佐衛門の創製という）であつた。その提灯には、どれも文字が書いてあり、中には朱字をもつて、

——シークエイナホウワン
希菱拿火船

と記してあるものもある。

この文字を見て、川路は「希菱」というのはキリスト、「拿火船」は今乗っている蒸気船の意であろう、と考えた。ところが調理室の白人のコックの中には、中国語を解する者がいなかったから、この提灯をさかさまに掛けてしま

った。だから文字はすべて逆になってしまう。日本人はそれを見て大いに笑ったので、西洋人は驚き、あわてて正しい状態にする始末。

その晩は余興もあつて、船員や乗客たちは一時たのしむことができた。調理室のコックたちが、歌を歌い踊ったり、寸劇などを演じた。また黒人の水夫五、六名は輪になり、手拍子、口拍子にて手足を動かして、踊りのようなものを演じて見せた。が、どれも日本人にはさっぱり解からず、観客の西洋人が笑うときは、こちらもそれに合わせて笑つて体裁を繕つた。

黒人の踊りが終わると、こんどは柳川一蝶齋に頼んで、手品や紙の蝶などの妙技を披露してもらつた。その芸は、大いに西洋人の喝采を博したが、日本人は皆、しばし故国に帰つたような面持ちで見っていた。ロイドのメモによると、クリスマスの日に「日本の手品師」と船のボーイへのチップとして七ドル支出されているが、これはかくし芸を見せてくれたことに對する礼の意味であらう。

ロイドは、船中徒然の折、日本人留学生たちに、各国の人性・風俗・歴史などについて語り、また時には日本歴史について質問することがあつたが、それに対して明確に答えられる者はほとんどおらず、困惑することもままあつた。⁽²⁾ 洋学にあこがれるのはよいが、日本のことを識らず、時折外国人からいろいろ尋ねられて返答に窮するのは昨今始まつたことでもなさそうである。

「英人（ロイド）頻に日本歴史を談して古来のことを問ふ。記誦（記憶と暗誦）なく時々困却せり」（「英航日録」）

と、川路はその折の困惑ぶりを伝えている。

十一月二十日（一二・二六）、この日、右舷に船三隻を見た。

翌二十一日と二十二日（陰曆）は特記事項なく、波も穏やかであった。

十一月二十三日（一二・二九）、船はポイント・デ・ガール Point de Galle（セイロン島——コロンボの南南東一〇四キロ）に到着した。甲板の上から当地の海岸を一望すると、右舷にヤシの林とコーヒーの樹木が見られ、それは日本の杉林のようでもあった。

海岸には小さな砲台が二、三箇所ある。また岸の一边には、日本という「見付」のような門が見られた。それはレンガをもつて堅固に出来ている。この門を入ると、左右に銃を持った兵卒が二名、歩哨に立っていた。右手の小坂を登って行くと市街に出るのである。

日本人留学生らは、ガール到着後、直ちに「オリエンタル・ホテル」（Oriental Hotel）に向った。川路の日記によると、このホテルは、レンガ造りの三階建てであったという。ホテルからはすばらしい港湾風景が一望の中に収められた。シンガポールで泊った「ヨーロッパ・ホテル」で一同は、粗略に扱われたので、総督と会った折に、経営者に嚴重注意して欲しい旨依頼した。が、ポイント・デ・ガールのホテルのサービス及び食事はよく、一同大歓迎であった。

食事（昼食？）のとき、米飯を口にしたが、米はひじょうに白く、少々長目であった。川路が、

「いずれの産なりや？」

と問うと、

「ベンガル米です」

との返事を得た。

川路は、当地の良質の米を江戸に持つて行き、肥後米といつても、江戸人は外米を知らないから、そのまま賞味するはずである、と思った。

昼下がり、川路とロイドは馬車にて「為替会所」(銀行)に行き、メキシコドルをイギリス貨幣と替えた。それは「此地より先はトルラルの通用甚だ宜しからざる故なり」ということであつたからである。

大六の「英行日記」に、「第四時頃より馬車にてガルデン^江赴き見るに椰子木甚多し」とある条は、一同近郊の植物園か何かを訪ねたということか。近くに川があつて、人食いワニがいると聞かされた。一同、五時ごろホテルに帰つたようである。同夜、大六は日本に送る手紙を認めた。

十一月二十四日(二・三〇)、ポイント・デ・ガールで一泊した日本人一行は、この日新造船「シムラ」(Simla)号に乗り換え、アデンに向うことになった。こんどの船は三本マストの郵便船である。長さ五十五間余、幅七間、六百五十馬力の蒸気機関をもち、一等船客を百六十人ほども収容できた。

一同は午後四時ごろ、シムラ号に乗り込み、午後六時には出帆の予定でいたが、二等船客のイギリス人がわからに病氣になつたため、夜八時まで出帆がおくれた。

ロイドは出帆に先立つて、ホテルで認めた書簡をパークス公使に送っている。その内容は――、二十九日の朝、ガールに到着したこと。今夕六時にシムラ号でアデン、スエズに向うこと等にふれたあと、留学生の健康状態について言及している。

シンガポール解纜後、成瀬・杉・福沢らが相次いで病気で臥せるようになった。福沢は疲労でいどであったので、ほどなく快癒したが、結核の気があつた成瀬と杉は、時々咯血した。そのためロイドは非常に心を痛め、時には医師の治療を請うた。が、幸いイギリス到着後、懸念された健康状態は好転し、転地療養の必要もなくなった。

「成瀬、杉、福沢らの軽い病気を除けば、留学生らは望める如くすべて順調に運んでおります。先般、書簡を呈して以来、福沢の健康はよくなりました。」⁽²²⁾

次いでロイドは、各留学生の英語の習熟度についてふれている。開成所その他すでに英語を学んでいた者を除くと、進歩の著しい者はいなかった。とくに年長の川路・中村・安井・岩佐などの進歩はおそかった。川路は英語が思うように話せないことを嘆き、次のように述べている。

「最早^{もはや}四十日余も英人之中に居る者故、今少し言語も分り可^{もすべし}申^{まを}理なれと、何分思^{なげん}う事も話せず、実に残念也、天性我記憶なきか為か、勉強の不足かと、只々嘆息」(「英航日録」)

しかし、留学生の中で最も進歩が顕著であつたのは、遣露使節団の反訳方(箕作秋坪)の息子——奎吾と大六の兄弟であり、航海中、イギリス人とお互に興味あることをテーマに会話を試みていた、という。航海中の留学生についていえば、「心情は美しく、礼儀は正しく」、同船客からも愛されていた、と報告している。

同夜、急病に患つたイギリス人船客が亡くなった。

十一月二十五日(一二・三一)、午前十時ごろ、昨夜逝つたイギリス人の葬儀が行なわれ、水葬にされた。

十一月二十六日——一八六七年一月一日(陽曆)。この日、留学生一同は陽曆の新年元旦をアラビア海で迎えた。が、とくに船中では新年の行事はなく、ふだんと変らなかつた。ただ、夜になってイギリス人たちがダンスパーティー

を催した。留学生らは、婦人が尊ばれ、いんぎんに扱われるのを見て奇異の感に打たれた。

翌二十七日から二十九日まで、特記事項はないが、シムラ号は一路アデンを目ざしてアラビア海を航行していた。

十一月三十日(一・五)、午前十時ごろよりソコトラ島(Socotra—アデン湾に入る南口に位置、長さ一一三キロ)が見えるようになり、翌十二月一日(一・六)の朝食前には、グアルダフィ岬(Cape of Guardafui—アフリカ大陸東部)を望見した。

十二月二日(一・七)、午後三時ごろ、シムラ号はアデン(Aden—南イエメンの首都、当時はイギリスの直轄植民地)に到着した。一同は夕食後上陸し、ラクダなどを見たのち帰船した。夜十時、出帆。夜、甲板に出てみると、牛(食用に積んだもの)がいたので、大六などはびっくりしてしまう。また、夜空を仰ぐと月が出ていたが、それは日本の二日月よりも大きかった。⁽²³⁾

ロイドのメモ「横浜からロンドンまでの船旅における付随費用」(Incidental travelling expenses on the voyage from Yokohama to London.)によると、この日、一同が上陸したときの舢舨代として十五シリング、シムラ号のボーイのチップとして八ポンド十五シリング払われている。また留学生は船中でソーダ水やレモネードを飲んでいるが、その代金は一ポンド十二シリングであった。変わったところでは、医師ヘンダーソンへの心づけとして三ポンド、シムラ号の薬剤師に十シリング支出されているが、これは成瀬・杉らが診てもらったときの謝礼と薬代であろう。

十二月三日(一・八)、シムラ号はすでにアデン湾より紅海に入っていた。午前十時ごろ、右舷にモカ(Mocha—北イエメン南西部の港町。モカコーヒーの輸出港として有名)を望み、また午後になるとHarnish, little Harnish, Zebbel, Zoogur Highlandsの四島(未詳)を見た。⁽²⁴⁾

十二月四日（一・九）、午前中雨が降る。夜、乗客や士官らが集つて芝居を行った。これはホワイト船長の許可と婦人方の後援の下に催されたものといふ。⁽²⁵⁾

十二月五日（一・一〇）、晴。アフリカのヌビア（Nubia——スーダン北部からエジプト南部に広がる地域の総称）を、左舷に望見した。シムラ号は刻々とスエズに向つて進んでいるが、川路は、紅海が地図で見たときの感じと違つて、意外と広いのに驚いている。

「紅海は幅も狭く図上にて見たる時は兩岸も常に見え申すへきと思ひし処^そ夫れは絵図の話、なか／＼此の辺は広く范々たるものにて、島々を見るのみ。外に陸地兩岸を看て走りゆくことなし。地球の大なるを図を似て論じ難しと発明す」（『英航日録』）

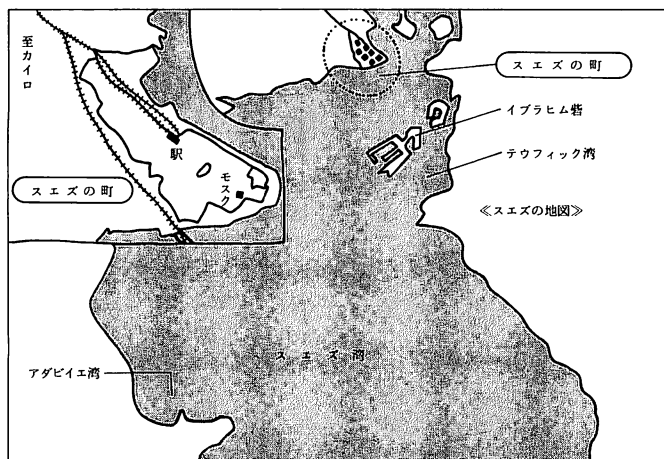
午後四時すぎ、ゼベベル・サラッカ（Zebbel Salacca）とゼベベル・トレブウル（Zebbel Trebur）島を見た。

十二月六日（一・一一）、この日エルバ岬（Cape Elba——現在のラス・ハーダルバ Ras Hadarba のこと。スーダン北東に位置し、紅海に突き出た岬）を見、午後三時ごろには左舷に Macour や St. Zabu（未詳）を望見した。

翌七日（一・一二）、午後四時ごろから夜十一時まづ、左舷に Zufutene, Shadwan, Ashrish などの島嶼を見た。またこの夜、百二十五フィートの高さの燈台を見た。

十二月八日（一・一三）、早朝より昼時まで Zavarine という島（高さ三十三フィート）を、午後には Kas Aboderage, Ras Ataka の二島を、またエジプト式の井戸などを見た。

午後三時ごろ、シムラ号は紅海の行き止まりスエズに到着した。停泊中の多くの船舶にまじつてエジプトのフリゲート艦などが見えたが、同艦はエジプト人が造つたものであると聞くと、「存外の開化」に驚き、エジプト人といえ



ども侮れぬ、と痛感した。

一行は手荷物以外の行李をすべて汽車でアレクサンドリア（カイロの北西二二三キロ）に送り、同夜、船中で一泊した。

十二月九日（一・一四）、晴。午前九時ごろ、一同は川蒸気船（はしけ）に乗り、二、三里ほど走ったところで波止場に上陸した。上陸して海岸の旅店（ホテル）に行き昼食を摂った。

「此処（スエズ）殊の外盗人多き故少しも油断なり難く手文庫及びブランケット（白毛布）一枚を自ら手に持ちて、旅舎迄到る。旅舎甚だ美麗、門の中に大庭ありてここにて食事をなす。食事の間楽人（がくじん）来りて奏楽す。栄華の極といふへし」（『英航日録』）

川路の日記には、一行が食事を摂ったホテル名までは記されていないが、おそらく停車場に近い、ホテルの中庭で食事をしたということであろう。ロイドのメモによると、スエズでは、

雇夫……………六シリング六ペンス

昼食……………三ポンド

楽師……………十シリング

などに、三ポンド十六シリング六ペンスばかり使った外、オレンジ・ブ

ランデー・ビール・赤ぶどう酒（クラレット）に十シリリング六ペンス、締めて三ポンド二十六シリリング六ペンス散財した。

一行は午後二時半ごろ汽車に乗り、スエズよりカイロに向った。「蒸汽車の在る処は別に鉄柵を造りたる構え内」にあり、駅のそばには三階建ての立派な電報局があつた。また線路のそばには、三、四十間ごとに電柱が立つていた。生まれて初めて「蒸汽車」というものに乗った一行は、その神速に驚嘆し、車窓に見る「近傍の山などは布の稿しよの如く見とむる能あたはず」（川路・記）といい、大六は「其速はやなる事矢に勝まさる」と形容している。当時、スエズ運河はまだ開削中であつたので、陸路カイロに向つたものだが、鉄道は単線ではなく、川路によると、五、六本も敷かれており、往復の蒸気車は引きも切らなかつたという。

午後四時半ごろ、汽車は小駅に止まつた。一同は下車し、駅舎の中で休息した。車中にはトイレがなかつたので、このとき用を足したという。「休所小屋」（休憩所）には、珍奇な諸国の物産を数多売つていた。それは、奇虫奇石にはじまり、ワキ鮫、鋸鮫のこぎり、大エビ（約五尺）などを乾燥させたものなどであつた。

駅の数十里四方は見渡す限り、砂漠で、人家も林も山も目に入らない。そんな砂漠の真つただ中の駅であつても簡単な食事は摂れたし、ぶどう酒・ブランデーなどを備え、旅客に出していた。約三十分停車した汽車は、再び動き出し、カイロを指し北上をつづけた。

夜八時半、カイロに到着。ロイドはスエズを出発する前に、カイロのイギリス領事館に電報をもって日本人一行の到着を知らせ、ホテルの手配などを依頼したもののだが、投宿したホテル名については詳らかでない。

十二月十日（一・一五）、この日、留学生一同はカイロ市の諸所を見物するのだが、その前に当地のトルコぶろ

（蒸しぶろ）に行き、積る旅のあかと汗を洗い流している。同日の午前八時ごろ、一同はふる屋に行ったが、日本の銭湯とは大いに異なる蒸しぶろには、奇異の感に打たれた。

十日朝第八時都尔加湯（トルコ）に行きし処余程日本の湯に□し其奇なる事言語に述べ難し（英行日記）

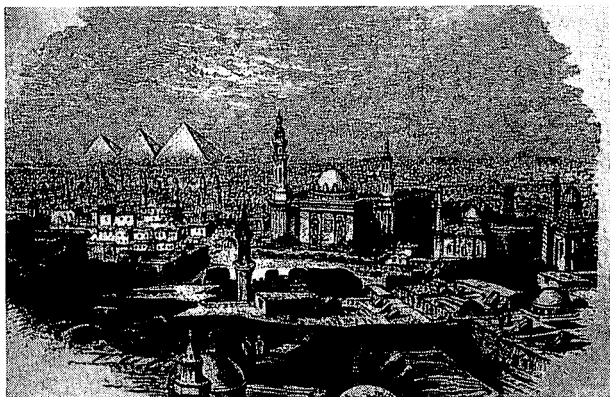
注・□は判読できない。

それよりロバや馬車に乗り、モカッタムの丘の突出部——城塞地区（シタデル）の「ムハンマド・アリ・モスク」（Gâmi' Mo-hammedi' Ali——別名「マーブル・モスク」）の見学に出かけた。この回教堂は、一八二四年に着工され、一八五七年、ムハマド・アリの息子サイド・パシャのもとで完成した。この寺院の大きな特徴は、巨大なドームと二本の高い尖塔（ミナレット）である。

一同は寺院の入口でロバや馬車を降り、内部に入るのだが、そこで目にしたものは、「皆マルブル也（なり）マルブルは日本臘石（ろうせき）なり」（英行日記）であった。大六の日記の回教寺院訪問記は、ここで終わっていて、いささか物足りない。

それより一同ホテルに戻ったのち、午後は「パシャの庭園」（Pasha's Garden）を訪れた。その訪問記を「英行日記」からひくと——、

午後花園に赴く種々草木あり。其中に一ツの亭あり。是をエジプト王の夏住居なりとぞ。上野中堂（上野寛永寺の中央の建物）の如き建物にて、其中に一池あり



カイロの市街図

(W. H. シーウオード『世界旅行』1873年刊より)

留学生一同は美麗を尽した国王の別邸を一覧したのち、庭園の池にいる鴨や鳥獣の檻などを見学し、旅宿に引き返した。ところで「パシャの庭園」だが、詳細らかにしない。おそらくアル・イズベキーヤ地区にある「イズベキーヤ公園」(El Ezbekiyeh)ではなからうか。

十二月十一日(一・一六)、この日留学生一同は、ナイル川畔にある「エジプト考古博物館」(El Antikhaneh)を訪れ、古代王朝の神像・座像・胸像・小像や金銀細工品などを一覽したが、ミイラを見たときには、思わず息をのんだ。

「最も驚きたるものは昔人の身体を歴然として蔵し置けるものなり。是れ英語にてママー(Mummy)といふものにして、人体の如き形を木にて製し、種々の彩色金銀等を施し、その中に人体を薬に浸して蔵す。如此もの六七も見たるうち、足など外匣の破損したるものありて、足の形分明なる黒色の石の如きものを見たり」(『英航日録』)

翌十二日(一・一七)、カイロで三泊した一行は、この日の朝、汽車にてアレクサンドリア(Alexandria)——カイロの北西二三キロにある港町)へ向った。カイロからアレクサンドリアまで、日本の里数にして六十余里を約六時間で走った。が、やはりその速さには驚嘆せざるを得なかった。

ロイドは英公使パークに宛ててカイロから書簡(一八六七・一・一七付)を出している。この中で、穏やかで快適

な航海のあと、去る十三日（陽曆）にスエズに着いたことを報告し、次いで成瀬と杉の健康状態に言及している。

「二人の留学生、すなわち成瀬と杉の健康状態にとくにふれておくことが肝要かと思われまゝ。他の学生および私自身の観るところから考えますと、兩人はときどき血を吐いており、二人とも日本を立つ前から肺病の気があつたように思われます。」

次いでこれらの症状がせき、を伴つたこと、とくに船酔いによつて体の衰弱が激しかったとき、それが著しかったことを伝えている。

ロイドは成瀬と杉の病状を心配するあまり、同船者でイギリス陸軍の医務長官ヘア博士に、兩人の診察を請うた。ヘア博士は「兩人はこのような健康状態で日本を離れるべきではなかった。イギリスの冬は死を招くかも知れない」といった。同医師の所見を聞いたロイドは、ロンドンに到着次第、ヘア博士の所見を外務大臣に伝えるつもりであると語っている。さらにロイドは、あらゆる機会を利用して、カイロとその周辺の興味を引く場所を留学生たちに見せた、といっている。

留学生の一行は、十二月十二日（一・一七）から同月十五日（一・二〇）までアレクサンドリアに滞在宿泊し、十六日に当地を出帆するのであるが、その間にまったく思いがけぬことが起つた。

一行はスエズに到着したとき、別便をもつて行李などをアレクサンドリアに送つておいた。だが、当地で受け取つた荷物のうち、安井・杉・市川ら三名の行李の錠がこじあけられ、何者かによつて中味が盗まれていることが判明した。

その内訳は次のとおりである。

(市川大尉)

絹製日本長衣紋付

同 日本外衣紋付

絹にて刺しゅうしたる袴

軍服・ベスト・ズボン

黒いカシミアの長上着

ズボン

(杉大尉)

軍服のズボン

脇差

(安井大尉)

一枚 二ポンド十六シリング

二枚 四ポンド十六シリング

一枚 十ポンド

十五ポンド

二枚 二ポンド八シリング

一枚 一ポンド七シリング

一枚 一ポンド七シリング

一口 十六ポンド十六シリング

絹製日本衣紋付

三枚 九ポンド十二シリング

立派なる絹の帯

一品 三ポンド四シリング

錦織の袴

一枚 十ポンド

旅行用バッグ

一個 二ポンド十六シリング

軍服

一枚 七ポンド十シリング

黒い皮製のバッグ

一個 二ポンド四シリング

(この中には次のものを含む)

銀ドルラル一枚四シリング

十一ポンド五シリング

六ペンスの相場にて

親族よりの重要書類、

評価額不詳

襦袢(じゆばん)(シャツ) 一枚十四シリングのもの

十枚 七ポンド

下襦袢(肌着) 一枚十六シリングのもの

十枚 八ポンド

下袴(パンツ) 一枚二十シリングのもの

六枚 六ポンド

下靴下二ダース

二ポンド八シリング

総計百二十三ポンド九シリング⁽²⁶⁾

盗難にあつたことを知つて驚いた川路らは、すぐロイドと船長(タンジョー号?)にその旨を伝え、またアレクサ

ンドリアの鎮台（長官）を船に呼んで事の次第を説明した。

ロイドは盗難品とその価を書付にするようにいい、その書付け通り、エジプト側に損害賠償を請求することになる。弁償者はエジプト王で、償金はロンドン到着後に受け取ることで、この事件は決着がついた。

賠償要求の際、盗難品目とその価は邦価で「……両」といった風に書き出し、あとでそれを英貨に換算したものが、先の盗難品目の内訳にある数字である。『英航日録』に「ドンス（綴子）の小袴一つ三十両、羽織一ツ八両と申す様に一々記して差出す」とあるところから考えると、市川や安井らが盗まれた「袴」一枚に対して請求した額は三十両、すなわち十ポンドということになり、この計算によると損害賠償額の総計百二十三ポンド九シリングは、当時の、邦価にして約三百七、八十両にもなろうか。

賠償額が法外なのは、江戸からロンドンまでの船賃も含めたからで、それに列強が日本にばく大な償金を申し立てた例にかんがみて、吹っ掛ける形となった。川路は法外な値段となったことに、

「賊難之為、同行人の荷を失ひ候は嘆息に候へ共、教師の周施を以て許多の償金を取立候は一快と云へし、英仏人の日本に來り、償金々と申立るも、皆此の如きものにて、莫大貧る候者ならん、夫れ道理は実に實きものにて、我に十分理ある故、如何許多之望も申出す事を得へし」（『英航日録』）と、日記に記している。

（以下次号）